

土地崩壊

豊島甲生の壇山 明治十一年六月十一日長雨のために大鳴動して山崖が崩壊して甲生全部に土石が流下して家屋の全潰が三戸、半潰が九戸、田畑の埋没が約十ヘクタール、実に未曾有の惨状であった。これは豊島石を採掘した跡が空虚となったことがその原因だとしている。(小豆郡誌は十四年とある。)

小江の寺山 明治四十一年頃から小江部落の上方寺山附近の畑地に亀裂が起きたり、陥落するなどの異状を呈した。それが漸次ひろがり、同四十四年十月八日大きな音響を發して約二ヘクタールの畑地が崩壊して、家屋一戸を埋没した。従って近くの居住者も二、三移転した。この変動につき種々の説があったが、その原因を審かにすることができなかった。(小豆郡誌)

この附近は古生層の陥没地帯で第三紀層(瀬戸内層)の彭軟層と、古成層の風化層が厚く接合した断層間で、これに多量の浸水が作用してベントナイト状となり、地殻の陥没、崩壊となって惨状を惹起したものであると考えられる。恐らくこの地殻の変動は緩急、時を得て永く続くものと思われる。対策を早急に講ずべきであろう。

肥土山向の上(ずえともいい、段とも言う) 明治十五年八月十五日午後三時大鳴動とともに、田畑と宅地が約十ヘクタール崩壊し、家屋が二戸埋没した。そこで平見地方の人家は、後難を恐れて土井の内や松の内などに居を移した。これについてこんな記録がある。大谷、芝山、左向も同時に、地ごりをおこした。中に土地の亀裂を見ようとして肥土山の人三名その地に行ったとき、地上に居たまま地ごりをした。字平水の仲蔵の居り家と、高橋又七郎の土蔵が埋没した。そこで平水の住民はこの災害がなお起きるものと恐れて松の内、土井の内などへ居を移したが

三、五年を経て復居した。崩壊地は荒地免租地となり、以後漸次復旧したが、なお数町歩は亀裂の上の荒廢地となり、下部は埋没して減反した。昭和四十年九月十八日、大雨とともに一大音響をあげ、土砂大石噴出しさまざまの地すべりをした。この地一帯は旧噴火時代の火山灰からなる地層が、石炭層を含む第三紀層の表皮に堆積した。これには、火山弾など安山岩石塊の包含が比較的少なく、ほう軟層をなし第三紀層と、この火山灰層の間に浸入した雨水、地下水が浸入しそれが浸蝕して陥没、地ごりの現象を起こしたと見られている。

其の他の地すべり地区

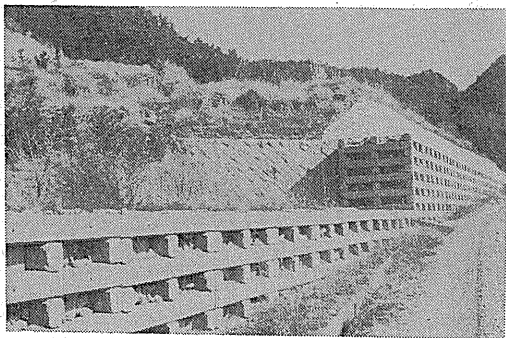
馬越地区 地積一五九ヘクタール。この地区住家一五七戸。大正二号池(貯水量五万トン。八千四百平方メートル)付近がひどい。昭和四十一年七月には雨でちかくの崖や堤防下の石がきが変形した。池が決壊すれば谷を通して約一キロ離れた目島地区(十五戸、七十七人)を押しつぶすとあって、昭和四十一年度の災害復旧工事でえん堤の補強、集水路を新設した。

四海地区 地積一〇五ヘクタール。伊喜末上方から小江ハンの池上方にかけた一帯の広範囲である。この地区の住家四百六十九戸。

硯(すずり)地区 地積三十一ヘクタール。地区の住家七十九戸。

右の馬越、四海、硯の三地区は、このほど国から地すべり地区に指定された。

この三地区で地すべりの被害が出たのは昭和四十年九月。当時、肥土山地区の



復旧工事後の馬越

地すべりが活発だったので、表面に出なかったが、規模は肥土山地区をはるかに上回るもので、地すべり原因はいずれも同じである。こんどの指定で、恒久的な地すべり防止工事が行なわれるが、昭和四十二年に調査をし、五年計画で四十三年度に着工した。工費は四、五億である。

第十五節 宝永の天変地異

宝永四年（一七〇七）十月四日、大地震がおきておよそ全国的な影響があったことを「続史愚抄」に記録がある。また「高松藩記」に、三代の恵公頼豊侯在職中同年同日に地震があつて、月をまたいでなお落ちつかない、地震の長く続いたことを記録してある。また同書には八月十七日大風洪水、九月十二日も同様、この天災の害をうけて、穀物が実らず飢饉となつたとある。「永代節木扣」に小豆島は宝永三年四月より八月までかんばつあり

とまた年代記にも注記する文がある。被災の細部の記録はないが、小豆島だけがその例外に立ったわけでもなかった。

次に記すのであるが、あたかも小豆島（九郷）富士の瀬事件の報復を考えてかどうかはわからないが、この年八月二十九日より、天領から高松藩へ移管されたのである。宝永三年の長いひでり以後地震風水害があいっいで発して百姓はうえを訴え、新税をうらみ、幕府直領から高松藩転属を恨み、このところ当分、天災、人災つづきで、内憂外患、泣き面に蜂の格好の悪い時代をむかえたのであった。